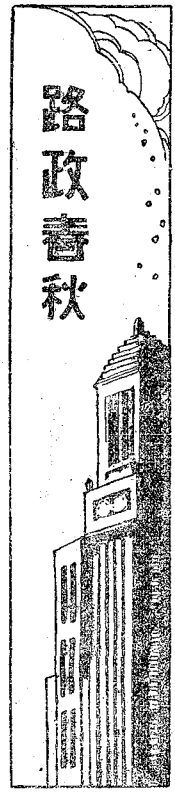

注意

本欄は讀者諸君の利用に提供す、治安と風俗とを害し又は人身攻擊に渉らざる限り奇想天外的の寄稿を望む、一文は四百字位にて取捨は編輯子に一任、原稿は道路の改良編輯部宛のこと。

惱みは絶えぬ道路の整備

道路の不整備は國際的恥辱と云はんよりは銃後の護の不仕鱈さと云ふべきである、折角道路を改良しアスファルトやコンクリート鋪裝を施こし漸く自轉車乘にも安心を與へ雨後の泥溜り、風の砂塵から逃がれらるると思ふのも唯數日の間でヤレ軌道の修理だヤレ瓦斯管の取換へだヤレ水道の修理だヤレ下水道の築造だヤレ電纜の補修だヤレ何々の施工だと掘り返し掘り起し、埋めては其の儘に放擲し何日も何日も打ちやつて置くの光景は勿論狹い歩道に電柱は立てられて居る。荷造の工作場の如きことや自轉車の置場然としたる狀況は都市といふ都市に絶えず見らるる處である。物資の節約交通の圓滑歩行の安全といふ方面から道路整備の急務なることを官民に敎ゆる方策はなきものかと赤自轉車生からの注文至極道理ある言分である。

憐れをとどむ未完成鐵橋の末路

世はあげて鐵、鐵、鐵の時代だ、鐵御奉公に應召しようといふ話——德島縣下池田驛のはるか東方で車窓から吉野川をながめると川を三段跳びよろしく白亞のピイヤーが清澄の水面に映えてゐるのが眼に入るだらう。土讃線、德島線の上り下りの旅客が〝一體あれはどんな次第ですか〟と一樣にさゝやいてゐる、それは三好郡池田町から箸藏村にいたる吉野川に架設されんとして八ケ年の春秋を未完成のまゝさらけ出してゐる假稱池田鐵橋は昭和七年三月工費十五萬圓をもつて池田町の田原、森の兩氏の個人經營として國道二十三號線（香川縣より高知縣に至る）を結ぶため計畫されたもの、着々と工事はすゝめられてゐたが同九年秋の西日本を席卷した颱風に橋脚の一基が倒壞、またこれと時を同じくして企業者の森、田原兩氏の死去に主を失つてしまひ沿岸兩地方民の待望も朝露の如く消えて空しく工事放棄のやむなきにいたつてゐたもの、ところが數年前から鐵價の高騰に目な

つけた同橋の權利相續者川崎彦一氏（德島市）が竣工もしない橋をそのまゝさらけておく不快さと「國をあげての鐵御奉公のこのごろせめて鐵骨なりともお役にたてよう」とセメントで固められた未完成の同橋を解體、なかみの鐵材を御用にたてることに決定、同氏からこのほど池田町役場に橋とりこはし方の申し出があつた、同橋はピイヤーが四基（一基は水中に倒壞）あり、これに使用された鐵材は莫大なもので工事着手の昭和七年に約二萬圓といはれてゐるものだけに時價にすればおそらく數倍、巨大な鐵材が時代の要求に役立つこととなつた。

個人主義はき違ひの大暗影

今次歐洲戰爭には宣傳が一つの大きな役割を演じてゐる。虛言の放送を以て國民に勝利の確信を與へ、敵國の志氣を沮喪せしめると共に、第三國をし好意的關心を深めようとするのがその目的らしい。如何に戰爭とはいへ、國際間には更に重んずべき正義が嚴存せねばならぬと考へるが、事もあらうにデマ放送が重大な作戰技術であるとは聊か不合理に思はれてならない。これは實に今や世界に瀰漫せる個人主義思想の一斷面であつてこの唾棄すべき形態觀念は、我等の生活の上にも浸潤しつゝあることを遺憾乍ら、否定することは出來ないのである。聖戰既に二年、漸く急迫せる祖國の狀態は充分解つてゐながら、表向はさて措いて裏面はどこまでも利己本位、極端な例だが祈願祭の歸途にはもう闇の相談、買溜の手柄話である。物資不足で人の困るのにつけ込んで、隙あらば一儲けしようと惡辣なる手段を講ぜんとし、利欲に血眼になつて國家的良心をすら等閑視しやうと一部商人の群、法網を巧に潜り、人にさへ知られなければ何をしてもいゝと云ふ、この憎むべき個人主義思潮は祖國の前途に大きな暗影を投ずるのである。戰爭にはつきものの思想の惡化、それはかうした所に源を發する。お互互が今こそほんたうに日本卽自己の觀念に立脚して警めたいものだと思ふとは北海タイムス紙上の一文である。國民自肅自戒の良い題目。

惜まれて去り行く人の心心

今次の地方官交迭で地方から惜まれながら勇退した良二千石諸氏の胸中に去來する感想は感慨無量なもののあることは想像に餘りあるが世に傳へらる所に依ると、二十三ケ年間の官吏生活で人物も修養も積み融通無碍、人をそらさぬ如才なさを備へ飲めば天衣無縫の野人振を發揮して義太夫も唸れば流行歌も唄ふと云はるる君島前新潟知事は「俺の人生はこれからだ」と、犧牲心の强い反面忍耐力ある特性を持つ縣民性野州魂を限りなく愛するといはるる足立收前栃木縣知事は「懷しい本縣を去るのは實に名殘惜しい」と、惜まれる恬淡な風格の持

主で大達内務次官とは同期生で而かも滿洲にあつた頃共に不過を喞ち合つた莫逆の友である清水前宮城縣知事は「後進に路を開くのだよ」と、赤松前京都府知事は「俺は辭表を提出して來た、かねての決心」と、風流歌人としての田中前愛知縣知事はさらばみなさんと最後のステートメントを發した、そして芳溪明府退官發表の日一首を詠して斯くなん「なつかしくみしろの鯱を仰きけり見果てぬ春の名古屋よさらば」と

頽廢の村は甦る關東の濱

茨城縣多賀郡平潟町は漁村として太平洋の荒波に疲弊頽廢を餘儀なくせられたが同町水產青年學校教諭志摩喜平氏が十六年前同校に赴任驚いたのは同町漁民の所謂〃板子一枚下は地獄、今日在つて明日をも知れぬ命だ〃との先入的觀念が極度に心を蝕ばんだ結果、短慮粗暴で打つ毆るか、一時的の遊樂に耽溺するかで青年達の姿はあまりにも慘めであつた、其の後十年間は無言のうちに彼等青年の一擧手一投足にも同氏の鋭い眼は注がれてゐた。樂天的で快活、勇猛果敢敏捷、敬神の念厚し等の美點が認められる反面、向學心に乏しいために人情を解せず自己主義となり從つて公德心が無く、すべてが不規律で衞生思想に缺けてゐる結果病多い、これを過去十ケ年間默々として洞察してゐた氏は先づ男女青少年の向學心の奮起に俟つより外に策無しと考へ、同校に籍を有しながら其の六〇パーセントが缺席する狀態を憂慮、昭和九年以來六ケ年間一日の如く自ら缺席者の家庭を訪問、缺席の理由を訊し理由ある家庭の父兄には漁村振興の重大性、非常時局を談合して出席誘致に力を注ぐ一方、その翌年からは私財を投じてピンポン、テニス、砲丸、圓盤、槍等を購入し同校に備へ生徒の體位向上を圖つてゐる。家庭訪問は今も尙續けられ町民感謝の的となつてゐるが同氏のこの熱意に感動した同町鄉軍分會長五十嵐安之氏は「私も及ばず乍らお手傳ひしませう」と昨春から家庭訪問を始めたので斯うした兩氏の滅私奉公の努力は次第に酬ひられ出席率はますます向上、同教諭赴任當時大正十三年の出席率は僅三九・四二パーセントで十年後の昭和九年には未だ四四・六二パーセントが更に五年後の十四年には八六・四七パーセントに向上し今一息といふ所まで漕ぎつけた、兩氏が家庭訪問をするので昔の缺席兒童であつた今の父兄達も大いに時局を認識し、昔の樣な粗暴な振舞ひも影を潛め遊樂に耽溺する事も極稀になり漁民の大部分は相當貯蓄も出來たので自己主義を離れ、統制ある文化生活になじみ、明朗な生活を始めて居ると。十六年の苦心に酬ひらるゝ狀態を視て志摩教授五十嵐兩氏の感想や如何。

……